「少年時代の想い出」

金谷　信

高校卒業から六十年とは驚きだ。私の高校での生活はさして長いものではなかったが、当時を振り返ってみたい。

高知へは小学校三年生の時転校した。江口小学校だった。すぐに高知大空襲にあい、姉弟三人、取敢えずオヒツにあり合わせのタクアンを放り込んで山に向かって一目散に逃げた。空一面、花火を散らばしたように焼夷弾が広がって落ちて来る。今にも自分の頭上に来るのではないかと恐怖を感じた。多くの皆さんが同様な経験をされていると思う。

空襲といえば大阪にいた時四条畷に集団疎開していて、大阪大空襲で大阪の街が真っ赤になって燃え上がるのを山の上から眺めていた。

高知市も危ないということで、中村の奥の山村に疎開した。終戦の詔勅もそこで聞いたが、よく分らなかった。終戦後高知に帰って来た時はまた別の小高坂小

学校だった。
小学校の入学は京都で、京都師範の付属小学校だった。
折柄湯川秀樹博士が日本人初のノーベル賞受賞ということで日本中が大騒ぎになったが、たまたまご長男と同級生だった。戦時中で学童疎開もあって仕方がないことであるが、小学校は結局六回転校することになった。

土佐中には幸い戦災を免れていた入明町の家から市内の中心街を通り、鏡川を渡って、歩いて三十分位の通学をしていた。学校の帰り途、丁度城東中学の横を通るので立ち寄ると野球部が練習中で、エース前田投手のピッチング練習を、「ホウ！あれがドロップというものか」と感心しながら坐りこんで長い時間眺めていた。当時前田投手は、このたび野球殿堂入りをした小倉の福島、桐蔭の西村、京都一商の北村等と共に中等学校野球の投手四羽烏と言われていた、野球少年のあこがれの的だった。
夏の甲子園の準決勝で小倉中と当り、確か一―〇で敗れ小倉中が優勝している。当時甲子園では宿舎に米持参だったので、負けた城東中が残った米をほかのチームに残して帰ったことが美談として報道されたことを記憶している。
その後前田さんが慶応大の監督の時高知時代のご縁を頼りに会社の野球部への

選手の採用についてお願いに行き、第一号として土佐高校昭和三十六年卒の松本惟秀君をいただいている。前田さんとは食事やゴルフにとずい分親しくさせていただいた。

学校から帰るとすぐカバンを放り出して家の隣の旧制高知高校のグランドに行き遊び仲間と野球を楽しんだ。根っから野球が好きだったのだと思う。

もう一つの高知の想い出としては初めて囲碁を学んだこと。父に勧められてプロの先生について一～二年やった。ずい分後になって姉から、先生が父に弟子に貰いたいと頼んで父が断ったという話を聞いた。この時父が承諾していたら自分の人生はずい分変わったものになっていたと思う。

会社に入って勿体ないことに碁石を全く握らず、六十何年ぶりに酒井芳美さんから、土佐高の大先輩のお二人、西山卓先生（昭和二十年卒、元大阪工大教授）、栗山昇先生を囲むサークルがあるけど来ませんかと誘われておっかなびっくり参加した。

これがきっかけで囲碁が復活し、一昨年関西棋院で三段を貰った。子供の頃教えられたことはいつまでも体に沁み込んで残っているものだと感心させられた。西山先生はその後逝去されている。

中学三年で父の転勤の関係で山形県鶴岡市に転校した。両親はすでに鶴岡に移っていて丁度学期の切れ目の夏休みに一人で旅することになった。当時の汽車の旅はずい分不便で車中二時間の長時間の旅であった。まず乗った土讃線はトンネルが多く、その都度窓を開け閉めするのだが、蒸気機関車の煤煙ですぐ顔は真っ黒。高松に着き席を取るために桟橋を走って宇高連絡船へ。宇野から岡山、岡山で乗り換え、漸く朝早く大阪に着いた。乗り継ぎの便まで長時間あったので駅の外へ出てみると駅前はまだまだ戦争の爪跡を大きく残しており、バラックが林立し、闇市となっていた。かなりいかがわしい場所だった。大阪から鶴岡までがまたン長旅でやっとこさ到着した。

鶴岡に着いてまず驚いたのが言葉で、教室で友達が話をしているのがさっぱり聞き取れない。これが同じ日本かという感じだった。不思議なものでそれが一週間も経つと分かって来るしその内自分も同じように喋り出す。語学の勉強とはこういうものかとつくづく感じさせられた。

鶴岡は徳川親藩の酒井藩の城下町で当時の人口、四万人位。藤沢周平が鶴岡市の出身。彼の小説に出て来る海坂藩はこの街を書いたもので、小説の中に登場う

る人物が今でも土塀の横から出て来る感じの街並である。
藤沢周平記念館や昔の藩校とか古い建物も残っていて観光で賑わっている。

今春、出身の鶴岡南高校の関西同窓会が、土佐高の関西同期会も以前あった日本酒「福寿」の酒心館で開かれ、六十年ぶりに私に合いたいと野球を一緒にやっていた二年後輩が二人東京からやって来た。その一人が金谷さんが野球について書いた冊子を持っていますよと言うので見てみると驚いたことに私が「くろしお」前号に書いた文章だった。

高知とはずい分疎遠になっていた。三年間のインドネシア勤務を了えて本社に勤務していた時、偶然エレベーター・ホールのところで石川尭也君に発見され、それ以来関西の同期会に出席させて貰っている。もう三十年位になる。三十数年ぶりに会ってよく私だと分かったものだと感謝している。

我々の年齢になると健康上いろいろと障害も出て来るが、少しでも長く元気で同期の皆さまと交流して行きたいと願っている。